REC TECHNICAL REPORT No.0015

ISSN 0918-2861
RECT-EL830

北海道における
大学英語教育のニーズ分析

An EFL Needs Analysis of Students at Private Universities and Colleges in Hokkaido

堀内満智子
Machiko HORIUCHI

米坂スザンヌ
Suzanne YONESAKA

シンシア・エドワーズ
Cynthia EDWARDS

ジェラルド P. ハルボーセン
Gerald P. HALVORSEN

佐藤デール・アン
Dale Ann SATO

小林サーリー
Sally KOBAYASHI

吉田　翠
Midori YOSHIDA

早坂　慶子
Keiko HAYASAKA

July. 1995

静修学園

北海道環境文化研究センター
HOKKAIDO RESEARCH CENTER OF ENVIRONMENT AND CULTURE

北海道における大学英語教育のニーズ分析*

【要約】

約5,000名の道内大学生・短大生を対象に、北海道における大学生の大学入学目標と英語教育へのニーズについてアンケート調査を実施した。その結果大学入学目標では、1）就職の可能性を高めるため、2）資格を得るため、3）学問知識を深めるため、4）人と会って友達になるため、の順で高かった。

このような目標で入学した大学生は、英語教育に関しても、コミュニケーションのための英語の習得に強い関心を示した。卒業までに身につけたい英語の能力として「海外へ行ったとき、英語でさまざまな日常的状況に対処すること」「英語で自分自身の考えや感情について話すこと」などに高い数値が現れた。

また、学校制度別、男女別、学年別、英語専攻・非専攻別、地域別に上の結果を分析し、英語教育へのニーズを明らかにした。

目次

1　目的と背景
2　実施方法
3　結果と分析
4　まとめ

＊　本論は、平成5年度北海道科学研究補助による「北海道における大学英語教育のニーズ分析」報告書を加筆・訂正したものである。

1　目的と背景

一般的に言語教育におけるニーズ分析研究の目的は、主としてカリキュラムの編成や教室作業にかかわるものである。面接、アンケート、個別追跡調査、授業評価などの方法によってニーズを分析することで、学習者の言語学習に対する考え方、学習姿勢、学習者の言語使用、言語態度はもとより、その学習者が学んでいる教育機関の姿勢も明らかになる。Richterich & Chancerel（1977）は学習者のニーズと彼等を取り巻く環境について、次のように述べている。

> 「そもそもニーズとは固定した一つの概念というよりは、学習者の知識と経験、あるいは、その学習者を取り巻く環境などとの相互作用の上に現れるものである。学習者は、現在おかれている状況の上にたって、これからしなければならないこと、したいことを考慮し、その実現のための最良の方策を自由に選択しなければならない。」

したがってこうしたニーズ分析には教育機関の掲げる学習到達目標、カリキュラム編成、教材機器、経営者・指導者の考え方などが反映される。本研究グループ８名は実際に大学生のニーズ分析を行い、具体的に北海道の大学生の英語教育に対する要望や態度について調査し、その結果をカリキュラム編成の一助とするために今回のアンケート調査を実施した。

ニーズ分析に関する研究は、日本ではあまり知られていない。比較的盛んに行われてきたのは欧米であるが、大学レベルでしかも英語教育に関するものというと、一般に公表されたものの数は非常に少ない。Lombardo（1988）はイタリアの４年制大学経済学専攻学生２００名を対象に、英語のクラスについてニーズ分析を試みた。調査の結果、「仕事で英語を使いたい」、「英語母語話者でない人と意思の疎通をはかりたい」が、英語を学びたい理由であった。話すこと、理解することが、読むこと、書くことより重要視されている。

中国の学生について調査したものもある。Sun（1989）はカナダで、中国人大学院生３７名、客員教授３２名を対象に、「研究に必要な英語」と「生活に必要な英語」に関する質問を各１５項目にわたり実施した。その結果、「研究に必要な英語」では学生、教員ともに「聞く力」に大きな関心を寄せていることがわかった。また、「生活に必要な英語」では、電話のかけ方やラジオ・映画・テレビの英語がわかる、新聞・雑誌が読めるといったコミュニケーションに必要な英語技能へのニーズの方が、道順の尋ね方やショッピングの仕方などよりは高いと報告されている。

わが国のニーズ分析の過程をみると、Widdows and Voller（1991）のPANSI (Profile of Attitudes, Needs and Student Interests) がある。首都圏の大学生８６名を対象に「大学生の要望、態度や関心事の概要研究アンケート」を実施し、現在学習している英語や到達目標について１１９項目にわたり調査した。その結果、「本調査の結果で最も注目すべき点は、学生が望んでいることと、実際に指導されていることの間には、大きなギャップがあるということである」(p.134)と指摘している。学生が学びたい英語と実際に受けている授業との間には明白な差があることがわかった。

さらにPANSIをもとに実施されたニーズ分析として、Harrison 他（1992）の神田外国語学院学生７９６名を対象とした調査や、Bush他（1992）の神田外語大学学生３４８名を対象とした調査がある。カリキュラム編成のために教員や学生を対象に実施された両調査では、教える側と教えられる側でのニーズに相違があるとの結果が報告されている。

ニーズ分析ではないが、小池他（1990）による全国レベルでの『わが国の英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』では、１０年間にわたって小学校、中学校、高等学校、大学の英語教員および学生、社会人約２万人を対象とした１２７項目に及ぶアンケート調査を実施し、日本の英語教育の現状を明らかにしている。その結果、アンケート回答者の大部分が、日本の英語教育の現状に満足していないことがわかった。大卒社会人が学生時代にあればよかったと思う授業は「聞く力」67.8%、「話す力」75.1%であるが、大学教員は英語教育の重点を「読む力」に置き、両者間の英語教育に対する見方に食い違いがある。

北海道では、これまでに大がかりな調査は実施されていない。数少ない事例研究では、丸川(1993)の札幌大学学生１１９名を対象とした教養外国語科目についてのアンケート調査や、Nakaya（1992）の北星学園大学学生１０６名を対象とした授業形態志向調査がある。両調査結果とも、学生はコミュニケーション活動を取り入れた授業形態を望んでいると指摘している。

また、西堀他（1994）による道内大学１２校４年生３００名を対象とした大学英語教育の実態調査によれば、大学時代に受けた一般英語の授業形式で、最も多かったのは「講読」（42%）であるが、受けて見たかった授業形式については「会話」（46%）の希望者が多く、学生が希望している授業形式と現実に受講した授業は異なっているという結果が出ている。

以上みてきたように、いくつかの調査の結果、英語教育に関しては学生の志向がコミュニケーションを重視した「聞く力」「話す力」の習得にあり、現実の授業内容との間にギャップがみられる傾向があることがわかった。大学生の英語教育に対する要望を知るために、実態調査をしニーズ分析をすることは、今後の北海道の英語教育にとって重要である。北方圏に位置するこの北海道にあって国際化が推進されている今日、実りある英語教育を実践することが人材育成の一助となるように思われる。

今回の調査では、全道４３の私立大学・短期大学学生４,３８６名に対し、以下の観点から、大学英語教育のニーズ分析を試みた。

1）大学の入学目標
2）卒業までに身につけたい英語の能力
3）英語専攻学生に対する英語専攻の理由
4）非英語専攻学生の英語選択の理由

2　実施方法

2-1　調査の目的

北海道に在る大学・短期大学に在籍する学生の大学入学の目標、大学卒業迄に身につけたい英語の能力、英語を学ぶ理由についてアンケートにより調査する。調査結果を学校制度別、男女別、学年別、英語専攻・非英語専攻別、大学所在地別に従ってそれぞれ分析し、北海道の学生の英語教育にたいするニーズを探る。

2-2 調査対象

1）学校の種類と所在地

2）回答者とその人数の決め方

道内にある私立の短期大学２７校、４年制大学１６校、６年制大学２校、合計４５校を対象とした。回答者は、英語専攻および英語以外を専攻する１・２年の学生合わせて約5,000名とする。回答者の学生数は、文部省認可の平成４年度入学定員総数*１７,４０６名のうち約３０％５,０００名を回答者数とした。短大と大学の英語、非英語専攻別入学定員総数から約３０％を割りだし、さらに学校の所在地を３地域（札幌市内・札幌都市圏**・その他道内）に分けて、各地域の短大と大学の入学定員総数の約３０％を割り出し、先の専攻別回答者数との人数の一致を確認した。回収された４５校のうち、記入不備の２校を除く４３校の中から４,３８６名の有効回答を得て、今回の分析対象とした。

* 平成４年度入学定員数は『受験グラフＪＧ１９９２－１０ OCTOBER 北海道特集号』による。

**本調査は、『平成５年版札幌市概要』を基に、札幌市が指定している札幌都市圏の中から札幌市を除外し、それを札幌市近郊地域の意味で、札幌都市圏として使用した。

2-3　調査項目の作成

Widdows と Voller の PANSI を一部修正して本研究の調査項目が作成された。アンケートでは、まず回答者の環境に関する項目（学年、性別、学部学科、その他）に加えて、第１部は大学入学の目標をたずねる１４項目、第２部は卒業迄に身につけたい英語の能力をたずねる１５項目、第３部は英語専攻学生に英語を学ぶ理由をたずねる１６項目、第４部は英語以外の専攻学生に英語を学ぶ理由をたずねる１６項目、合計６１項目からなる調査用紙を作成した。（付録参照）

第１部と第２部の項目では、回答の評価基準として PANSI 研究の５段階を７段階に変えた。第２部では、さらに三つの観点から英語教育に対する学生のニーズをみることにする。第一に、身につけたい英語の能力を（１）専門分野に必要な英語学習群（２）コミュニケーションのための英語学習群（３）教科としての英語学習群に分類してニーズをみること、第二に、英語の４技能習得に対するニーズをみること、第三にその英語の４技能を機能別にみることである。

第３部は英語専攻学生が、第４部は英語以外の専攻学生が「はい」と「いいえ」で回答する。両部

は項目Aのみ異なっており、第３部の項目Aは「英語の教師になりたいから」を理由の一つとし、第４部では「たとえ英語が必修科目でなくても、あなたは英語を選択しますか」を問う。それ以降の１５項目はいずれも英語を学ぶ理由を選ぶものである。

回答はマークシートを用い、回収後コンピュータで処理される。

2-4　調査実施手順

（1）新学期開始後６週間経った６月中旬頃実施した。
（2）調査実施に協力する日本人教員と英語を母国語とする外国人教員に、日英両語で書かれた実施の手引きを添付した。
（3）調査は授業時間を利用して実施し、平均２５分かかった。回答者から記入中に調査項目について質問は一切出なかった。

2-5　調査実施後の処理

（1）マークシートは回収後コンピュータで集計処理された。

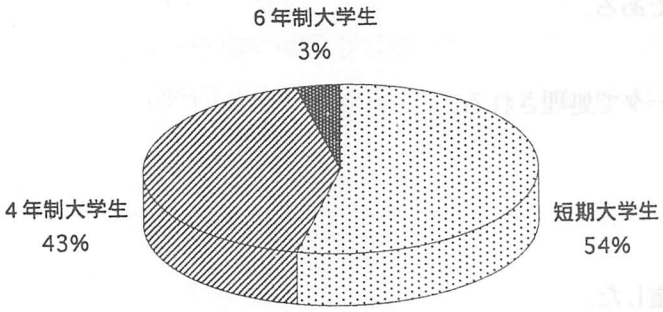
（2）記入が不完全な、または記入が不正確なマークシートは除外された。なお、４５校のうち２校は、回収はされたが上記の手順に不都合があり本調査データから除かれた。従ってデータ処理対象校は４３校となった。

（3）有効回答者数は以下のとおりとなった。

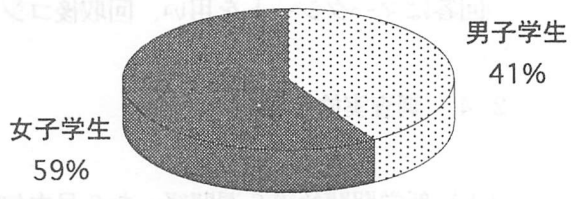
学校制度	英語専攻学生	非英語専攻学生	合計
短期大学	３３３	2,０２８	2,３６１
４年制大学	１７１	1,７０３	1,８７４
６年制大学	0	１５１	１５１
合計	５０４	3,８８２	4,３８６

性別	英語専攻学生	非英語専攻学生	合計
男子	５０	1,７６６	1,８１６
女子	４５４	2,１１６	2,５７０
合計	５０４	3,８８２	4,３８６

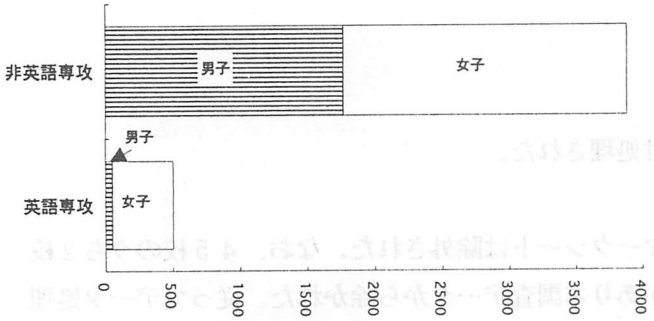
学校制度別回答者数



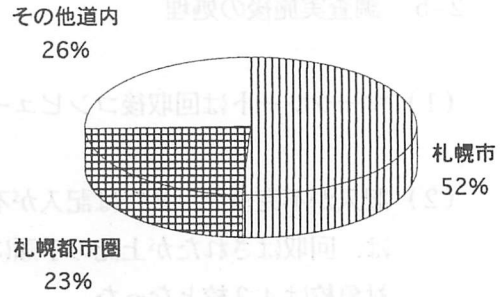
男女別回答者数



専攻・男女別回答者数



大学所在地別回答者数



（4）有効抽出データは、Microsoft Excel 4.0 を用いて集計されたあと、ＳＰＳＳを用いて処理された。

（5）分析については、第１部と第２部は各項目の平均値（０～６）を、第３部と第４部は「はい」「いいえ」の頻度数（%）を出した。第１部と第２部は、最初に回答者全体の大学入学目標と英語教育へのニーズを概観するために、最も高い平均値を示した項目から降順で並べた。次に学校制度別、男女別、学年別、英語専攻・非英語専攻別、大学所在地別の５観点からの差をみるために、各部の項目の平均値を比べた。平均値はｔ検定または ONE-WAY ANOVA(Scheffe) で有意差（p<.001）を確認し、差の大きいものを取りあげて考察した。同様に、第３部は英語専攻学生の英語専攻理由、第４部は非英語専攻学生の英語選択理由について、最初に全体の傾向をみ、次に上記の５観点から、カイ２乗検定で有意差を確認し、比較した。

（6）大学生の英語教育にたいするニーズを多角的に把握するために、第５部を設けて、第２部の「卒業までに身につけたい英語の能力」と「英語の４技能」に関して更に分析を加えた。

（7）６年制大学については、有効回答を得られたのが１校のみであったため、全道の６年制大学の標本とはせず、考察する際の参考とした。

3　結果と分析

以下、本調査の結果と分析を述べる。その順序は次のとおりである。まず、各部の平均値をその数値の高い順に示し、北海道の大学生の入学目標と英語教育のニーズに関して全体の傾向をみる。次に、学校制度別、男女別、学年別、専攻別、大学所在地別にわけて、それぞれの差の大小で傾向を論じることとする。

3-1　第1部　大学入学の目標

第1部の結果を平均値の高い順に並べると表1のようになる。上位項目２３、３３に見られるように、学歴と資格取得により、大学卒業後の就職の可能性がより広がるという認識が一般的であるといえる。またそれにつづく項目３２にあるように、学問知識への意欲も高いとみることが出来る。逆に項目３１、３５のような消極的目標で大学に入学した学生は非常に少ない。

表1　　大学入学の目標

項目番号	項目内容	平均	標準偏差
２３	就職の可能性を高めるため	4.45	1.47
３３	資格を得るため	4.17	1.73
３２	学問知識を深めるため	4.11	1.42
２２	人と会って友達になるため	3.93	1.42
２５	仕事や日常生活に役に立つ実技を身につけるため	3.64	1.75
２８	価値観や人生観を求めて深めるため	3.30	1.53
２９	人間関係について学ぶため	3.19	1.49
３０	自主的に勉強することを学ぶため	3.06	1.43
２６	趣味を生かす時間を得るため	2.98	1.65
２７	創造的才能を見つけて伸ばすため	2.81	1.56
２４	親から独立するため	2.42	1.68
３４	日本や世界で起こっている出来事について関心を高めるため	2.24	1.40
３１	就職するのを避けるため	1.73	1.77
３５	別に目標はない	0.91	1.38

3-1-1　学校制度別大学入学の目標

表2の項目で2年制と4年制とを比較した場合、最も差の大きい項目は２５、３３である。両項目とも2年制のほうが4年制よりも実践につながる目標が高い。逆に項目２６、３４では4年制のほうが2年制よりも高く、実践的なものよりも、関心事や視野を広めることを目標とする傾向がある。短大生は2年後に訪れる就職への関心からか、それを意識した入学目標が強く現れている。一方、大学生は時間的ゆとりもあり教養を高めることに、より強い関心がある。6年制大学の対象校が、専門技能を養成し資格取得につながる大学であるために、項目２５、３２、３３で2年制、4年制に比べて

高い数値を示している。

表２　学校制度別大学入学の目標

項目番号	項目内容	２年制	４年制	６年制
３３	資格を得るため	4.43	3.72	5.75
３２	学問知識を深めるため	4.16	3.96	5.06
２２	人と会って友達になるため	3.84	4.05	
２５	仕事や日常生活に役に立つ実技を身につけるため	3.90	3.19	5.25
２９	人間関係について学ぶため	3.12	3.31	2.89
３０	自主的に勉強することを学ぶため	3.11	2.99	3.36
２６	趣味を生かす時間を得るため	2.72	3.33	2.60
２７	創造的才能を見つけて伸ばすため	2.74	2.95	2.23
２４	親から独立するため	2.29	2.56	2.89
３４	日本や世界で起こっている出来事について関心を高めるため	2.08	2.46	2.11

$p < 0.001$

3-1-2　男女別大学入学の目標

表３にみられるように項目３３、３２、２５、３０では男女に差があり、女子の数値が高くなっている。特に項目３３、３２ではその差が大きく、男子学生に比べ女子学生は実践・学問の双方に関心が高い。一方男子学生は、項目２６、２４で女子学生に比べて数値が高く、視野を広め、自立への関心が高い。

表３　男女別大学入学の目標

項目番号	項目内容	男子学生	女子学生
２３	就職の可能性を高めるため	4.30	4.56
３３	資格を得るため	3.71	4.50
３２	学問知識を深めるため	3.80	4.33
２２	人と会って友達になるため	3.83	3.99
２５	仕事や日常生活に役に立つ実技を身につけるため	3.38	3.83
２８	価値観や人生観を求めて深めるため	3.16	3.40
３０	自主的に勉強することを学ぶため	2.82	3.24
２６	趣味を生かす時間を得るため	3.26	2.78
２４	親から独立するため	2.69	2.24
３１	就職するのを避けるため	1.93	1.59

$p < 0.001$

3-1-3　学年別大学入学の目標

表４にみられるように、項目３３、２５において１学年は２学年より高い数値を示し、実用的な技

能や資格の取得を大学入学の目標としていることがわかる。２学年では、過去１年間の大学生活の影響を反映してか、項目２８、２９、３４のような、自己啓発と視野を広めることが入学の目標となっている。

表４　学年別大学入学の目標

項目番号	項目内容	１学年	２学年
３３	資格を得るため	4.29	3.79
２５	仕事や日常生活に役に立つ実技を身につけるため	3.73	3.37
２８	価値観や人生観を求めて深めるため	3.26	3.44
２９	人間関係について学ぶため	3.15	3.32
３４	日本や世界で起こっている出来事について関心を高めるため	2.20	2.36

$p < 0.001$

3-1-4　英語専攻・非英語専攻別大学入学の目標

表５にみられるように、項目３２、３０では英語専攻、非英語専攻の間に大きな差がみられる。英語専攻学生には、自主的に学問を深める意識が強い。つづいて差がみられるのは項目２８、３４で自己啓発、社会への視野の広がりに関心がある。また、項目２５から、非英語専攻学生が英語専攻学生より実技の習得に関心があるといえる。

表５　英語専攻・非英語専攻別大学入学の目標

項目番号	項目内容	英語専攻	非英語専攻
３２	学問知識を深めるため	4.56	4.05
２２	人と会って友達になるため	4.12	3.90
２５	仕事や日常生活に役に立つ実技を身につけるため	3.37	3.68
２８	価値観や人生観を求めて深めるため	3.64	3.26
２９	人間関係について学ぶため	3.45	3.16
３０	自主的に勉強することを学ぶため	3.43	3.02
３４	日本や世界で起こっている出来事について関心を高めるため	2.56	2.20

$p < 0.001$

3-1-5　大学所在地別大学入学の目標

表６に見られるように項目２５、３３では差がみられ、札幌都市圏が、札幌市内およびその他道内より高い数値を示している。これは札幌都市圏には専門技能を養成し、資格取得を目標とする短大、大学が多いことを反映したものである。また項目２４から、札幌市内は数値が低く札幌都市圏、その他道内へいくほど親からの独立に関心が高いことがわかる。本調査の回答者の約50％が札幌市内に属

する学生であることの影響とも考えられる。

表6　大学所在地別大学入学の目標

項目番号	項目内容	札幌市内	札幌都市圏	その他道内
23	就職の可能性を高めるため	4.58	4.48	4.18
33	資格を得るため	4.04	4.51	4.11
24	親から独立するため	2.25	2.41	2.78
22	人と会って友達になるため	4.02	3.76	3.89
25	仕事や日常生活に役に立つ実技を身につけるため	3.49	4.11	3.50
28	価値観や人生観を求めて深めるため	3.37	3.15	3.32
29	人間関係について学ぶため	3.26	3.03	3.21
27	創造的才能を見つけて伸ばすため	2.86	2.61	2.92
34	日本や世界で起こっている出来事について関心を高めるため	2.34	2.07	2.21

$p < 0.001$

3-2　第2部　卒業までに身につけたい英語の能力

第2部の結果を平均値の高い順に並べると表7のようになる。上位項目41、50、53から、コミュニケーションに必要な、英語を聞く能力・話す能力の習得に高い関心を示していることがわかる。それに比べて、英語の専門技術的能力の習得に対する関心は低い。

表7　卒業までに身につけたい英語の能力

項目番号	項目内容	平均	標準偏差
41	海外へ行ったとき、英語でさまざまな日常的状況に対処すること	4.48	1.40
50	英語で自分自身の考えや感情について話すこと	3.71	1.68
53	英語の素晴らしい発音を身につけること	3.52	1.60
49	英語を日本語に円滑に訳すこと	3.51	1.52
42	英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解する	3.47	1.46
43	英語の本や雑誌や新聞などを読むこと	3.31	1.49
46	英語で礼儀正しい会話をすること	3.30	1.50
45	英語の単語やイディオムをたくさん覚えること	3.09	1.53
52	英語のビジネスレターやメモやテレックスなどを読んだり書いたりすること	2.89	1.49
51	英語の文法に精通すること	2.71	1.45
44	英語で手紙や小説や詩などを書くこと	2.67	1.50
47	英語で学問的または専門技術的な講義を理解すること	2.54	1.51
48	英語の専門書や論文を早く効果的に読むこと	2.44	1.55
55	英語で学問的または専門技術的な討論をすること	2.08	1.46
54	英語で学問的または専門技術的な論文を書くこと	2.07	1.42

3-2-1　学校制度別卒業までに身につけたい英語の能力

表8からわかるように、短大、大学においてあまり大きな差はなく、大学がやや大きな数値を示している。しかし項目４５においては、短大の方が僅かに上回っている。６年制は全体的に高い数値を示している。専門技能や資格の取得と関連のある英語学習へのニーズが現れているのかもしれない。

表8　　学校制度別卒業までに身につけたい英語の能力

項目番号	項目内容	2年制	4年制	6年制
５０	英語で自分自身の考えや感情について話すこと	3.61	3.82	4.07
４３	英語の本や雑誌や新聞などを読むこと	3.20	3.37	4.16
４５	英語の単語やイディオムをたくさん覚えること	3.19	2.96	
４７	英語で学問的または専門技術的な講義を理解すること	2.42	2.54	4.55
４８	英語の専門書や論文を早く効果的に読むこと	2.25	2.49	4.84
５５	英語で学問的または専門技術的な討論をすること	1.91	2.14	3.81
５４	英語で学問的または専門技術的な論文を書くこと	1.90	2.10	4.52
				$p < 0.001$

3-2-2　男女別卒業までに身につけたい英語の能力

表9にみられるように、全ての項目において女子学生の数値が男子学生のそれを上回っている。特にその差が大きいものに項目５３、４４、４５、５０がある。女子学生は、自己表現に必要な技能の習得に関心が高い。

表9　　男女別卒業までに身につけたい英語の能力

項目番号	項目内容	男子学生	女子学生
４１	海外へ行ったとき、英語でさまざまな日常的状況に対処すること	4.27	4.63
５０	英語で自分自身の考えや感情について話すこと	3.43	3.92
５３	英語の素晴らしい発音を身につけること	3.10	3.81
４９	英語を日本語に円滑に訳すこと	3.35	3.62
４２	英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解する	3.24	3.63
４３	英語の本や雑誌や新聞などを読むこと	3.10	3.46
４６	英語で礼儀正しい会話をすること	3.11	3.44
４５	英語の単語やイディオムをたくさん覚えること	2.78	3.31
５２	英語のビジネスレターやメモやテレックスなどを読んだり書いたりすること	2.69	3.03
５１	英語の文法に精通すること	2.57	2.82
４４	英語で手紙や小説や詩などを書くこと	2.34	2.90
			$p < 0.001$

3-2-3　学年別卒業までに身につけたい英語の能力

表１０にみられるように、項目５０、４２、４３、５１において２学年の数値が１学年を上回っている。過去１年間の大学英語教育を反映してか、自己表現や情報入手を可能にするレベルの英語習得へのニーズが高い。また、このレベルの英語の能力を強化するための基本として、文法学習の必要性も僅かながらみられる。

表１０　　学年別卒業までに身につけたい英語の能力

項目番号	項目内容	１学年	２学年
５０	英語で自分自身の考えや感情について話すこと	3.66	3.90
４２	英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解する	3.43	3.61
４３	英語の本や雑誌や新聞などを読むこと	3.25	3.50
５１	英語の文法に精通すること	2.67	2.84
			$p < 0.001$

3-2-4　英語専攻・非英語専攻別卒業までに身につけたい英語の能力

表１１にみられるように、英語専攻学生は全ての項目に対して関心が高いことが数値よりわかる。非英語専攻学生の数値も３-２-２、３-２-３、３-２-５にみられる数値よりも高くなっていることから、英語専攻、非英語専攻共に英語を身につけることに関心は高いといえる。大学英語教育新カリキュラムの編成に際しては、このニーズを生かすことが強く望まれる。その中でも英語専攻学生について、項目５０、５３、４３、４４では非英語専攻学生との差が際だって大きい。英語専攻学生は雑誌、新聞、手紙などで情報入手および交換ができるレベルの英語習得を望んでいる。一方これと比較すると、項目４７、４８、５５、５４にみられるように、英語専攻、非英語専攻共に専門分野の英語学習への関心は低いといえる。

表１１　英語専攻・非英語専攻別卒業までに身につけたい英語の能力

項目番号	項目内容	英語専攻	非英語専攻
４１	海外へ行ったとき、英語でさまざまな日常的状況に対処すること	5.26	4.38
５０	英語で自分自身の考えや感情について話すこと	5.11	3.53
５３	英語の素晴らしい発音を身につけること	4.75	3.36
４９	英語を日本語に円滑に訳すこと	4.24	3.41
４２	英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解する	4.51	3.34
４３	英語の本や雑誌や新聞などを読むこと	4.46	3.16
４６	英語で礼儀正しい会話をすること	4.05	3.21
４５	英語の単語やイディオムをたくさん覚えること	4.01	2.97
５２	英語のビジネスレターやメモやテレックスなどを読んだり書いたりすること	3.74	2.78
５１	英語の文法に精通すること	3.63	2.59

４４	英語で手紙や小説や詩などを書くこと	3.79	2.52
４７	英語で学問的または専門技術的な講義を理解すること	3.21	2.46
４８	英語の専門書や論文を早く効果的に読むこと	3.11	2.35
５５	英語で学問的または専門技術的な討論をすること	2.78	1.98
５４	英語で学問的または専門技術的な論文を書くこと	2.68	2.00
			$p < 0.001$

3-2-5　大学所在地別身につけたい英語の能力

大学所在地別では、身につけたい英語の能力に関して表１２にみられるように、項目４７、４８、５４、５５にのみ差がみられる。これらはいずれも専門分野の英語学習に関するもので、札幌都市圏の数値が他の所在地に比べて高い傾向を示している。これは、札幌都市圏には専門技能を養成し、資格取得を目標とする短大、大学が多いことと関連があるといえる。

表１２　　大学所在地別身につけたい英語の能力

項目番号	項目内容	札幌市	札幌都市圏	その他道内
４７	英語で学問的または専門技術的な講義を理解すること	2.40	2.83	2.56
４８	英語の専門書や論文を早く効果的に読むこと	2.30	2.71	2.46
５５	英語で学問的または専門技術的な討論をすること	1.97	2.27	2.11
５４	英語で学問的または専門技術的な論文を書くこと	1.93	2.36	2.09
				$p < 0.001$

3-3　第３部　英語専攻の理由

全体の11.5%を占める英語専攻学生５０４名（男子５０名、女子４５４名）が、英語を専攻した理由を「はい＝０」「いいえ＝１」で答えた結果が表１３である。（従って平均値の低い方がニーズは高い）。項目６７「英語が楽な科目だから」英語を専攻したと答えた学生は6%（0.94）、項目７２「英語は国際語として、日本のビジネスにも必要だから」英語を専攻したと答えた学生は88%(0.12)である。つまり項目７２を英語専攻の理由として選んだ学生の数が最も多い。その他仕事、趣味、国際交流、情報入手のため、など多岐にわたっている。反面、「英語の教師になりたいから」英語を専攻したと回答したものは１４%にすぎない。

表１３　英語専攻の理由

項目番号	項目内容	平均	標準偏差
７２	英語は国際語として、日本のビジネスにも必要だから	0.12	0.32
６５	英語を話す外国人と友達になりたいから	0.22	0.41
６６	英語の本や雑誌、新聞などを読みたいから	0.22	0.41
６８	海外旅行をしたいから	0.23	0.42
６１	英語が役に立つ仕事につきたいから（英語教師以外で）	0.24	0.43
７４	日本人と違う考え方を学びたいから	0.26	0.44
６２	国際人になりたいから	0.27	0.44
７３	英語圏の文化について学びたいから	0.29	0.45
６４	英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌が好きだから	0.30	0.46
７１	短期語学研修をしたいから	0.45	0.50
６３	中学校や高校で英語の成績がよかったから	0.47	0.50
６９	外国で仕事がしたいから	0.61	0.49
７０	長期留学をしたいから	0.65	0.48
７５	海外で起こっている出来事に遅れたくないから	0.65	0.48
６０	英語の教師になりたいから	0.86	0.35
６７	英語が楽な科目だから	0.94	0.23

3-3-1　学校制度別英語専攻の理由

表１４にあるように４年制では約半数が項目７０、６９を英語専攻の理由として挙げている。従って、今後の大学英語教育カリキュラムに、長期留学制度を設けたり、将来の海外生活に備えたカリキュラムを期待するところである。

表１４　学校制度別英語専攻の理由

項目番号	項目内容	２年制	４年制
６３	中学校や高校で英語の成績がよかったから	0.42	0.56
６９	外国で仕事がしたいから	0.65	0.53
７０	長期留学をしたいから*	0.72	0.51

$p < 0.01$　$^*p < 0.001$

3-3-2　男女別英語専攻の理由

表１５の職業観を表している項目６０、７２が示すように、男子はビジネスよりも教職に関心を示し、女子はビジネスの方に関心を示している。また女子の方は、海外旅行や短期語学研修を専攻の理由としている割合が高い

表１５　男女別英語専攻の理由

項目番号	項目内容	男子学生	女子学生
７２	英語は国際語として、日本のビジネスにも必要だから	0.24	0.11
６８	海外旅行をしたいから	0.40	0.21
７１	短期語学研修をしたいから	0.66	0.42
６０	英語の教師になりたいから*	0.66	0.88
		$p < 0.01$	* $p < 0.001$

3-3-3　学年別英語専攻の理由

１、２学年ともに、入学時点での専攻理由を示しているので、表１６にある３項目以外の項目では、学年別の差はみられない。

表１６　学年別英語専攻の理由

項目番号	項目内容	１学年	２学年
６４	英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌が好きだから	0.35	0.25
６３	中学校や高校で英語の成績がよかったから	0.53	0.40
６０	英語の教師になりたいから	0.83	0.89
			$p < 0.05$

3-3-4　学校所在地別英語専攻の理由

表１７にあるように、地域別で差が出たのは項目６４のみであり、その他の項目には地域差がみられない。英語専攻の理由は３地域に共通しているといえる。

表１７　学校所在地別英語専攻の理由

項目番号	項目内容	札幌市	札幌都市圏	その他道内
６４	英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌が好きだから	0.27	0.48	0.29
				$p < 0.01$

3-4　第４部　英語を選択した理由

非英語専攻学生３,８８２名に対し、「たとえ英語が必修科目でなくても、あなたは英語を選択しますか。」とたずね、「はい」と回答したものは男子１,０３３名、女子１,３３４名、合計２,３６７名（61.0%）である。表１８の数値は、この２,３６７名を対象に「はい＝０」「いいえ＝１」で答えた結果の平均値である（従って平均値の低い方がニーズが高い）。英語専攻学生に比べ、「はい」と

答えた数値の高い項目は少なく、ビジネスと海外旅行がその中では際だっている。

表１８　英語を選択した理由

項目番号	項目内容	平均	標準偏差
９１	英語は国際語として、日本のビジネスにも必要だから	0.17	0.38
８７	海外旅行をしたいから	0.26	0.44
８４	英語を話す外国人と友達になりたいから	0.37	0.48
８３	英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌が好きだから	0.39	0.49
８５	英語の本や雑誌、新聞などを読みたいから	0.42	0.49
９３	日本人と違う考え方を学びたいから	0.43	0.49
８１	国際人になりたいから	0.51	0.50
９２	英語圏の文化について学びたいから	0.59	0.49
９４	海外で起こっている出来事に遅れたくないから	0.67	0.47
８０	英語が役に立つ仕事につきたいから（英語教師以外で）	0.68	0.47
９０	短期語学研修をしたいから	0.73	0.44
８８	外国で仕事がしたいから	0.76	0.43
８２	中学校や高校で英語の成績がよかったから	0.80	0.40
８９	長期留学をしたいから	0.83	0.38
８６	英語が楽な科目だから	0.90	0.30

3-4-1　学校制度別英語選択の理由

表１９にみられるように、短大、大学では４項目にのみわずかな差がみられる。６年制ではこれらの項目の数値が短大、大学より高い。

表１９　学校制度別英語選択の理由

項目番号	項目内容	２年制	４年制	６年制
８５	英語の本や雑誌、新聞などを読みたいから	0.43	0.42	0.23
８１	国際人になりたいから	0.55	0.48	0.41
８８	外国で仕事がしたいから	0.80	0.75	0.42
８９	長期留学をしたいから	0.85	0.82	0.70

$p < 0.001$

3-4-2　男女別英語選択の理由

表２０によると、男女間の差が比較的大きいのは項目８４、８５、９０で、いずれも女子が男子の数値を上回っている。英語選択の理由からすると、女子は短期語学研修には関心があるが、海外で働くことや海外の出来事に関しては男子より関心が低い。

表２０　男女別英語選択の理由

項目番号	項目内容	男子学生	女子学生
９１	英語は国際語として、日本のビジネスにも必要だから	0.20	0.15
８７	海外旅行をしたいから	0.29	0.24
８４	英語を話す外国人と友達になりたいから*	0.42	0.33
８５	英語の本や雑誌、新聞などを読みたいから*	0.46	0.38
９４	海外で起こっている出来事に遅れたくないから*	0.63	0.70
９０	短期語学研修をしたいから*	0.78	0.69
８８	外国で仕事がしたいから	0.73	0.78
８６	英語が楽な科目だから*	0.87	0.92
		$p < 0.01$	$*p < 0.001$

3-4-3　学年別英語選択の理由

表２１にある３項目以外の項目では学年別の差はみられない。つまり１・２学年で英語選択の理由に大きな違いはみられないといえる。しかしながら２学年には、実像のはっきりしない国際人になるよりは、具体的に英語圏の文化を知るための手段として英語を学びたいという意識が、僅かではあるがみられる。

表２１　学年別英語選択の理由

項目番号	項目内容	１学年	２学年
８１	国際人になりたいから	0.50	0.57
９２	英語圏の文化について学びたいから	0.60	0.52
８６	英語が楽な科目だから	0.91	0.85
			$p < 0.001$

3-4-4　学校所在地別英語選択の理由

所在地別による差はみられなかった。英語選択の理由は３地域に共通したものと言える。

3-5　第５部　種類別英語学習目標

第２部の「卒業までに身につけたい英語の能力」を（A）学びたい英語の種類：「専門分野に必要な英語学習群」「コミュニケーションのための英語学習群」「教科としての英語学習群」、（B）英語の４技能：「聞く能力」「話す能力」「読む能力」「書く能力」、（C）機能別４技能の組み合わせ：「聞く・話す能力」「読む・書く能力」に分類し、それぞれの観点から考察した。

3-5-(A) 学びたい英語の種類

これまでみてきたことから予測できるが、表２２にあるように、項目９９のコミュニケーションのための英語へのニーズが最も高い数値を示している。一方、専門分野に必要な英語へのニーズは低いと言える。

表２２　学びたい英語の種類

項目番号	項目内容	平均	標準偏差
９８	専門分野に必要な英語学習群 (項目46・47・48・52・54・55)	2.52	1.22
９９	コミュニケーションのための英語学習群 (項目41・42・43・44・50)	3.53	1.21
１００	教科としての英語学習群 (項目45・49・51・53)	3.18	1.25

3-5-(A)-1

表２３にみられるように専門性の高い学校ほど、専門分野に必要な英語を必要としている。

表２３　学校制度別学びたい英語の種類

項目番号	項目内容	２年制	４年制	６年制
９８	専門分野に必要な英語学習群	2.41	2.55	3.96
				$p < 0.05$

3-5-(A)-2

表２４にみられるように全ての項目で男子より女子の数値が高い。特に項目９９、１００でその差が大きい。

表２４　男女別学びたい英語の種類

項目番号	項目内容	男子学生	女子学生
９８	専門分野に必要な英語学習群	2.47	2.56
９９	コミュニケーションのための英語学習群	3.28	3.71
１００	教科としての英語学習群	2.93	3.37
			$p < 0.05$

3-5-(A)-3

表２５が示すように、札幌都市圏の大学では、専門分野に必要な英語へのニーズが他の地域よりも高い傾向にある。

表２５　学校所在地別学びたい英語の種類

項目番号	項目内容	札幌市内	札幌都市圏	その他道内
９８	専門分野に必要な英語学習群	2.43	2.70	2.53
				$p < 0.05$

3-5-(B)　英語の４技能

表２６にみられるように、(A) の結果と呼応してオーラル・コミュニケーション技能習得へのニーズが、英語の読み書きの技能習得へのニーズより高い。

表２６　学びたい英語の種類

項目番号	項目内容	平均	標準偏差
１０１	話す能力（項目42・47）	3.00	1.26
１０２	聞く能力（項目46・50・55）	3.01	1.20
１０３	書く能力（項目43・48・52）	2.51	1.21
１０４	読む能力（項目44・52・54）	2.85	1.24

3-5-(B)-1

表２７が示すように、４技能共に専門性の高い大学ほどニーズが高い。

表２７　学校制度別英語の４技能

項目番号	項目内容	２年制	４年制	６年制
１０１	話す能力	2.91	3.06	3.64
１０２	聞く能力	2.93	3.02	4.11
１０３	書く能力	2.45	2.51	3.48
１０４	読む能力	2.74	2.89	3.99
				$p < 0.05$

3-5-(B)-2

表２８にあるように、全ての項目で女子の数値が男子の数値を上回っている。項目１０１、１０３ではその差が大きい。女子の方が表現する技能への関心が高い。

表２８　男女別英語の４技能

項目番号	項目内容	男子 学生	女子学生
１０１	話す能力	2.84	3.11
１０２	聞く能力	2.89	3.09
１０３	書く能力	2.34	2.63
１０４	読む能力	2.73	2.93
			$p < 0.05$

3-5-(B)-3

表２９にあるように、学校所在地別で差がみられたのは項目１０２、１０３で札幌市内と札幌都市圏の間のみである。

表２９　学校所在地別英語の４技能

項目番号	項目内容	札幌市内	札幌都市圏	その他道内
１０２	聞く能力	2.95	3.11	
１０３	書く能力	2.47	2.62	
				$p < 0.05$

3-5-(C)　機能別４技能の組み合わせ

表３０にみられるように、(A)　(B)　と同様オーラル・コミュニケーション技能習得へのニーズが高い。

表３０　学びたい英語の種類

項目番号	項目内容	平均	標準偏差
１０５	聞く・話す能力（項目42・46・47・50・55）	3.02	1.15
１０６	読む・書く能力（項目43・44・48・52・54）	2.68	1.19

3-5-(C)-1

表３１に示されるように、専門性が高い学校ほど両技能の習得に対するニーズが高くなっている。特に６年制では読んで書く技能へのニーズが高い。

表３１　学校制度別機能別４技能の組み合わせ

項目番号	項目内容	２年制	４年制	６年制
１０５	聞く・話す能力	2.94	3.06	3.85
１０６	読む・書く能力	2.58	2.70	3.91
				$p < 0.05$

3-5-(C)-2

表３２にあるとおり、女子の方が男子より両技能の習得に対するニーズが高い。

表３２　男女別機能別４技能の組み合わせ

項目番号	項目内容	男子学生	女子学生
１０５	聞く・話す能力	2.88	3.12
１０６	読む・書く能力	2.54	2.77
			$p < 0.05$

3-5-(C)-３

表３３にあるとおり、札幌市内と札幌都市圏の間に、項目１０６で違いがみられる。

表３３　学校所在地別機能別４技能の組み合わせ

項目番号	項目内容	札幌市内	札幌都市圏	その他道内
１０６	読む・書く能力	2.63	2.78	
				$p < 0.05$

4　まとめ

以上、北海道における大学生の大学入学目標と英語教育へのニーズについて実施したアンケート調査結果を概観した。北海道の学生の大学入学目標は、1）就職の可能性を高めるため、2）資格を得るため、3）学問知識を深めるため、4）人と会って友達になるため、の順で高かった。一方、首都圏の大学生を対象にしたアンケート調査 PANSI の結果にある上位４項目：1）学問知識を深めるため、2）価値観や人生観を求めて深めるため、3）人と会って友達になるため、4）資格を得るため、と比べてみると北海道の大学生は、就職を意識した実践的な姿勢が強いといえる。

このような目標で入学した大学生は、英語教育に関しても、コミュニケーションのための英語の習得に強い関心がある。卒業までに身につけたい英語の能力として「海外へ行ったとき、英語でさまざまな日常的状況に対処すること」「英語で自分自身の考えや感情について話すこと」などが高い数値を示した。英語の４技能習得のニーズにもこれがよく現れている。　英語専攻学生と非英語専攻学生の中で英語を選択した学生について、英語を学ぶ理由として最も高かったのは、「英語は国際語として、日本のビジネスにも必要だから」であった。英語専攻学生は、次に仕事、趣味、国際交流、情報入手のためなど、理由が多岐にわたっている。一方、非英語専攻学生で英語を選択した学生は「海外旅行をしたいから」を選択の理由に挙げている。これは卒業までに最も身につけたい英語の能力「海外へ行ったとき、英語でさまざまな日常的状況に対処すること」と一致する。

学校制度別にみると、短期大学の学生は、２年後の就職を意識してか、４年制大学の学生に比べて実践につながる目標をもっている。一方、時間的にゆとりのある４年制大学の学生は、これに加えて教養を深め視野を広げる姿勢がみられる。

大学所在地別では、札幌都市圏が札幌市内およびその他道内より、資格と実技の習得に関心を示している。英語能力の習得では、専門分野の英語学習に関心が高い。

調査全体を通して、男子学生に比べて女子学生に積極的な姿勢がみられた。具体例をあげると、大学入学の目標に関しては、実践・学問の双方に関心が高く、卒業までに身につけたい英語の能力では、自己表現に必要な技能の習得により強い関心を示した。英語専攻学生では、教職以外の仕事につきたいことを専攻の理由としている。非英語専攻学生では、英語選択の理由として、短期語学研修などを挙げている。

現在わが国の外国語教育にあって、カリキュラムを編成するに当たり、その目標を設定し、学習者のニーズ分析結果を充分に生かすことは的を射たことといえよう。１９９１年文部省が大学設置基準を改め、大学における外国語教育の目的を、「当該外国語の言語運用能力の養成をはかることによって異言語文化を体験し、異なる人間の世界を発見し、人格的な陶冶をはかることにある」とし、外国語教育への取り組みを大学独自で検討するよう指示したからである。本研究が、将来北海道の多くの大学、短期大学において英語教育のカリキュラム展開の一助となることを期待するものである。

平成元年３月１５日付けで告示された新学習指導要領によると、オーラル・コミュニケーション中心の英語教育が、平成６年度の高校１年生から実施されることになっている。この指導要領のもとで英語教育を受けた学生が、平成９年度から大学生になる。その時点で今回のような英語教育のニーズ分析を再び行いたいと考えている。

参考文献

Busch, M., M. Elsea, P. Gruba & F. Johnson. (1992).' A study of the needs, preferences and attitudes concerning the learning and teaching of English Proficiency as expressed by students and teachers at Kanda University'. 『神田外語大学紀要』6, 174-235.

Harrison, I., P. Gruba & L. Kanberg. (1992). A Survey of Japanese Vocational Student Needs. Unpublished paper presented at the 1992 Japan Association of Language Teachers 18th Annual Conference on Language Teaching and Learning. November 20-23, 1992. Kawagoe,Japan.

Edwards, C.J. (1994) "A Study on Students' Perceived EFL Needs Part 1: rationale, Overview, and English Literature Major Results" 『北海道武蔵女子短期大学紀要』26, 67 - 110.

Halvorsen, J.P. (1995) "An Analysis of the Perceived EFL Needs of English Course Students", 『國學院短期大学紀要』13, 55 - 73.

早坂慶子 (1995) 「北海道における大学英語教育のニーズ分析ー北星学園大学の場合」『北星学園大学文学部北星論集』32, 67 - 91.

堀内満智子 (1995) 「短期大学学生にみられる英語学習志向への一考察」『静修短期大学研究紀要』26, 103 - 115.

小池生夫他 (1990) 『わが国の英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』JACET

Lombardo, Linda. (1988). *Language Learner's Needs, Interests and Motivation: A Survey of EFL Students in an Italian Economics Faculty.* ERIC number ED 304 006. FL 017 802.

丸川 桂子(1993)「カリキュラム改革に向かって」『札幌大学教養部リベラルアーツ』7, 90-100.

Nakaya, Akira. (1992) "A Survey of English Language Learning-Style Preferences" *Hokusei Review 29.* 241-279.

西堀ゆり他 (1994) 「全道大学英語教育の実態調査-道内１２大学４年目学生アンケート調査を踏まえて」『北海道大学言語文化部紀要』25, 97 - 137.

Richterich, Rene & .Chancerel J. L. (1977). *Identifying the Needs of Adults Learning a Foreign Language.* Council for cultural co-operation of the Council of Europe. 5-106.

Sun, Yilin. (1989). *An ESL Needs Assessment: Chinese Students at a Canadian University.* ERIC number E 314 956. FL 018 310.

Widdows, S., & Voller, P. (1991). PANSI:A Survey of the ELT Needs of Japanese University Students. *Cross Currents,* 18 (2), 127-141.

Yonesaka, Suzanne (1994) "An Analysis of First-Year Students' Perceptions of Their EFL Needs" 『北海学園大学人文論集』2, 87 - 121.

大学生の態度・要望・関心事の概要についてのアンケート
回答のしかたについての諸注意

1．第１部と第２部は全員が回答します。第３部は英語を専攻している学生が、第４部は英語以外を専攻している学生が回答します。あなたに該当する各部のすべての項目に回答してください。回答しない項目があると、すべてが無効になりますので注意してください。

2．第１部～第４部のそれぞれの指示に従って、該当するところをマークしてください。（つまり該当するところの()を、黒く塗りつぶしてください。）

マーク例

良い例	悪い例
●	● ⊗ * ●

（* 薄くて読み取れない）

3．回答にはＨＢの黒鉛筆（シャープペンシルも可）またはそれに近いものを使用し、回答を訂正する場合にはプラスチック消ゴムで完全に消してください。

4．回答用紙は汚したり折曲げたりしないでください。また所定以外のところには記入しないでください。

5．アンケート用紙には絶対に何も書かないでください。

6．回答用紙と共にアンケート用紙も提出してください。

7．時間を十分に取って回答してください。

大学生の態度・要望・関心事の概要についてのアンケート

第１部　学生全員

あなたがこの大学に入って２年間または４年間を過ごす目標は何ですか。項目Ａ～Ｎに、次の７段階基準で答えてください。あなたの場合に当てはまるところの数字をマークしてください。

７段階基準
- 0　全然当てはまらない
- 1　ほとんど当てはまらない
- 2　あまり当てはまらない
- 3　少し当てはまる
- 4　かなり当てはまる
- 5　大部分当てはまる
- 6　完全に当てはまる

A　人と会って友達になるため
B　就職の可能性を高めるため
C　親から独立するため
D　仕事や日常生活に役に立つ実技を身につけるため
　（例えばコンピュータの使い方、自動車の整備など）
E　趣味を生かす時間を得るため
　（例えばスポーツ、音楽、旅行など）
F　創造的才能を見つけて伸ばすため
G　価値観や人生観を求めて深めるため
H　人間関係について学ぶため
I　自主的に勉強することを学ぶため
J　就職するのを避けるため
K　学問知識を深めるため
L　資格を得るため
　（例えば英検、教員免許状、会計士など）
M　日本や世界で起こっている出来事について関心を高めるため
N　別に目標はない
（マークシートのＯ～Ｓ欄は今回使いません）

第２部　学生全員

英語を学ぶことに関して、あなたは卒業するまでに、どのような英語の能力を身につけたいですか。項目Ａ～Ｏに、次の７段階基準で答えてください。あなたの場合に当てはまるところの数字をマークしてください。

７段階基準
- 0　全然大切ではない
- 1　ほとんど大切ではない
- 2　あまり大切ではない
- 3　少し大切である
- 4　かなり大切である
- 5　非常に大切である
- 6　絶対に大切である

A　海外へ行ったとき、英語でさまざまな日常的状況に対処すること
　（例えば外食したり買い物をするときなど）
B　英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解すること
C　英語の本や雑誌や新聞などを読むこと
D　英語で手紙や小説や詩などを書くこと
E　英語の単語やイディオムをたくさん覚えること
F　英語で礼儀正しい会話をすること
G　英語で学問的または専門技術的な講義を理解すること
H　英語の専門書や論文を速く効果的に読むこと
I　英語を日本語に円滑に訳すこと
J　英語で自分自身の考えや感情について話すこと
K　英語の文法に精通すること
L　英語のビジネスレターやメモやテレックスなどを読んだり書いたりすること
M　英語のすばらしい発音を身につけること
N　英語で学問的または専門技術的な論文を書くこと
O　英語で学問的または専門技術的な討論をすること
（マークシートのＰ～Ｓ欄は今回使いません）

第３部　英語を専攻している学生

あなたはなぜ英語を専攻したのですか。項目Ａ ～Ｐに、「はい」の人はＹを、「いいえ」の人はＮをマークしてください。

Ａ　英語の教師になりたいから
Ｂ　英語が役に立つ仕事につきたいから（英語教師以外で）
Ｃ　国際人になりたいから
Ｄ　中学校や高校で英語の成績が良かったから
Ｅ　英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌が好きだから
Ｆ　英語を話す外国人と友達になりたいから
Ｇ　英語の本や雑誌や新聞などを読みたいから
Ｈ　英語がらくな科目だから
Ｉ　海外旅行をしたいから
Ｊ　外国で仕事をしたいから
Ｋ　長期留学をしたいから
Ｌ　短期語学研修をしたいから
Ｍ　英語は国際語として日本のビジネスにも必要だから
Ｎ　英語圏の文化について学びたいから
Ｏ　日本人と違う考え方を学びたいから
Ｐ　海外で起こっている出来事に遅れたくないから
（マークシートのＱ～Ｓ欄は今回は使いません）

第４部　英語以外を専攻している学生

次の質問Ａに、「はい」の人はＹを、「いいえ」の人はＮをマークしてください。

Ａ　たとえ英語が必修科目でなくても、あなたは英語を選択しますか。

Ｎをマークした人は、ここで回答は終わりです。

Ｙをマークした人は、なぜ英語を選択したいのですか。項目Ｂ～Ｐに、「はい」の人はＹを、「いいえ」の人はＮをマークしてください。

Ｂ　英語が役に立つ仕事につきたいから
Ｃ　国際人になりたいから
Ｄ　中学校や高校で英語の成績が良かったから
Ｅ　英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌が好きだから
Ｆ　英語を話す外国人と友達になりたいから
Ｇ　英語の本や雑誌や新聞などを読みたいから
Ｈ　英語がらくな科目だから
Ｉ　海外旅行をしたいから
Ｊ　外国で仕事をしたいから
Ｋ　長期留学をしたいから
Ｌ　短期語学研修をしたいから
Ｍ　英語は国際語として日本のビジネスにも必要だから
Ｎ　英語圏の文化について学びたいから
Ｏ　日本人と違う考え方を学びたいから
Ｐ　海外で起こっている出来事に遅れたくないから
（マークシートのＱ～Ｓ欄は今回使いません）

Machiko HORIUCHI, Suzanne YONESAKA, Cynthia EDWARDS, Gerald P. HALVORSEN, Dale Ann SATO, Sally KOBAYASHI, Midori YOSHIDA and Keiko HAYASAKA,
An EFL Needs Analysis of Students at Private Universities and Colleges in Hokkaido / REC Technical Report No.15[EL830], July, 1995 / HOKKAIDO RESEARCH CENTER OF ENVIRONMENT AND CULTURE / SEISHU GAKUEN, SAPPORO, 004 JAPAN

（執筆者紹介）

堀内満智子（ほりうち まちこ）／静修短期大学助教授

米坂スザンヌ(Suzanne YONESAKA)／北海学園大学助教授

シンシア・エドワーズ(Cynthia EDWARDS)／北海道武蔵女子短期大学講師

ジェラルド P. ハルボーセン(Gerald P.HALVORSEN)／国学院短期大学助教授

佐藤デール・アン(Dale Ann SATO)／北星学園大学助教授

小林サーリー(Sally KOBAYASHI)／北星学園女子短期大学非常勤講師

吉田　翠（よしだ みどり）／専修大学北海道短期大学教授

早坂　慶子（はやさか けいこ）／北星学園大学助教授

平成７年７月31日

編　集：　北海道環境文化研究センター

発　行：(学)静修学園　和野内　崇弘

〒004 札幌市豊平区清田4-1-4-1 ☎(011)881-8844